

日本で知った台湾の悲劇

林

建良

● 本会常務理事
世界台湾同郷会副会長



林建良常務理事

人生の邂逅の一つのようなテーマで「台湾」

を語るのには、いささか戸惑いを覚える。なぜなら、台湾は私の生まれ育った故郷であり、祖国だからだ。たしかに日本に十数年間居住し、刎頸の交わりと言える同志たちも日本人ばかりなのだが、大雑把で無神経、整理整頓の能力はゼロに近く、考える前に行動してしまう私の一挙手一投足のすべては台湾的で、日本人気質とは相反するものばかりだ。

私が台湾で受けた教育は、台湾無視の中国人居教育であった。学生時代の私は台湾の歴史についてまったく無知であったが、中国の歴史には詳しくあった。なぜなら、台湾では入試から公務員試験に至るまで、中国の歴史、地理、文学

は必要不可欠な科目だからである。

小学校から大学までの私の国語の先生（台湾は大学でも国語は必修科目である）は、すべて中国からやってきた所謂「外省人」だった。彼らは中国文化の偉大さを吹聴する一方、あらゆる機会に「台湾は文化のない不毛の地である」と強調し、台湾社会を軽蔑していた。このような教育政策は、実は民進党政権下の今も残っており、小中学生が使うノートや教科書などには未だに「正々堂々たる中国人になれ」とのスローガンがプリントされている。台湾政府が台湾人に「わが国は歴史も文化もない化外の地だ」と教えている訳で、自国への誇りをなくそうとする滑稽さは、日本とそっくりでもある。

蔣介石政権は、台湾人の中国人化を行う一方で、日本語をはじめとする植民地時代からの日本的要素を一掃する政策をとった。その結果、日本語を通じて吸収してきた台湾人の近代的な知識と知恵の蓄積は、一夜にして無用のものとなり、世代間の知恵の伝達も分断されてしまったのである。

生後十ヵ月で母を亡くした私は、母の実家である田舎で祖父母に育てられた。五歳から六歳までの一年間は、父と倉敷出身の日本人の継母の三人で生活していた。

当時暮らしていた台中市内の和風の一軒家には五右衛門風呂がついており、その中にある熱い鉄パイプが怖かったため、入るのを嫌がっていた記憶がある。当時、家での会話はすべて日本語であり、畳の上の卓袱台で食事をする生活様式も日本そのものであった。当時の台湾の都会では、ごく普通の光景であったようだが、田舎から出てきた私は強いカルチャーショックを受けた。父に学ぶ意欲も失せ、ついにその生活

には慣れなかった。

その後、中国人的教育を受け、自然に父の世代とのギャップが大きくなり、文化的には完全な断絶が生じてしまった。父の世代もうまく中国語を操れないこともあり、彼らの持つものを戦後世代に伝えることはできなかった。

このような悲劇的状况こそ、台湾のアイデンティティがいまだに確立できない一番大きな要因ではなからうか。

日本を抜きにして台湾の近代史は語れない。しかし現実的に、戦後の台湾人は日本抜き歴史しか知らないのだ。歴史に空白は存在しえない。五十年間の記憶と文明の蓄積を力づくで抹消しようとした蔣介石の中国的なやり方が、いかに恐ろしいものであったかがわかる。

日本人には理解しにくいかもしれないが、これが台湾の現実だ。私が戦前世代の台湾人の知恵を学び、その考え方を理解できるようにしたのは、日本に来て日本語を使えるようになったからだ。これも歴史の皮肉なのだろうか。